

日当直、こんな時どないするねん～あんたの疑問こたえまっせ！！～

細菌検査（グラム染色）

◎福岡 京子¹⁾地方独立行政法人 りんくう総合医療センター¹⁾

今回のワークショップは、「日当直、こんな時どないするねん～あんたの疑問こたえまっせ！！～」と題して、日当直時に自分の担当部署以外の業務を行う際に遭遇する疑問や不安に対して、具体例を挙げて解説し、疑問や不安を解消すると共に、ワークショップ終了後は明日からの日当直業務へ意欲的に取り組める「ワンランク上のできる技師」に繋がるヒントを紹介する。

細菌検査分野では、喀痰のグラム染色に焦点をしばって解説する。グラム染色は、普段実施していない技師にとっては苦手分野の一つであるが、業務として従事する細菌検査担当技師（以後、細菌検査技師）は、いとも簡単に実施する。その違いは何なのか？苦手な業務を毎日どのようにして実施しているのか？そこには単に経験の差だけではない、細菌検査技師だけが知るちょっとしたコツやポイントがある。

一口にグラム染色といっても、塗抹標本の作成から染色、そして鏡検と三つの作業工程がある。塗抹標本の作製に注目すると、細菌検査技師は材料ごとに、さらには同じ材料であってもそれぞれの検体に合わせて標本作製する。なぜそうするのか？それは、全ての検体を一辺倒に塗抹していたのでは、その後実施する染色や鏡検に影響し、見にくい標本になってしまうからである。見にくい標本では、いくら経験豊富な細菌検査技師であってもパフォーマンスを十分に発揮できない。そのため細菌検査技師は塗抹標本作製の段階から、染色や鏡検が上手くできるように工夫している。また鏡検においても単に菌体を探しているのではない。患者情報や材料の種類、材料の色や臭いなどから疾患と原因病原体を予測して鏡検を行う。それは、患者情報や材料によって検出される菌種に傾向があり、菌体の特徴的な形態を併せて考えれば、単に「グラム陽性球菌」や「グラム陰性桿菌」という結果だけでなく、具体的に「○○菌と思われます。」というように菌種推定もできると知っているからである。今回のワークショップでは、そのような細菌検査技師が行うグラム染色について症例を交えて紹介し、日当直時にも役立つ塗抹標本作製におけるちょっとした工夫や鏡検のポイント、鏡検から菌種推定に至るまでの考え方を解説する。

最後に、筆者が細菌検査技師になるずっと以前の新人の頃、「これは正しく染まっているのか？」とグラム染色の染色工程に不安を感じ、コントロールとして身近にあるものを染めた経験がある。当時、初心者でもはっきりとわかるグラム陽性桿菌を観察することができた。筆者と同じように染色工程に不安を感じている方に向けて、今回あらためてコントロールとして用いた身近な材料とその染色結果を併せて紹介する。

連絡先－072-469-3111